〔論　説〕

ディアスポラ帰還、故国、階層構造、そしてアイデンティティ
── 韓国における朝鮮民族ディアスポラ帰還者の経験*

チャンズー・ソン（Changzoo Song）
角田猛之訳

Ⅰ．はじめに ── ディアスポラ帰還移民

1980年代後半から世界のさまざまな地域において、多くの「民族的移住帰還者」（‘ethnic return migrants’）（「ディアスポラ移住帰還者」（‘diasporic return migrants’）とも呼ぶことができるだろう）が現れだしている。民族的移住帰還者とは、一世代以上にわたって海外に住み続けた後に民族上の故国に帰還する人びとのことを意味している（Sheffer 2003; Tsuda 2003）。ディアスポラ集団は「海外の故郷（ふるさと）」（‘home abroad’）において、自らの民族的な文化的アイデンティティを維持しつつ、数世代にわたる定住の後に受け入れ社会にしっかりと定住しているが故に、再度いずれかの地（とくに彼らの父祖の故国）に移住することはないので、このような帰還の動向は国際的な移民の形態としてはむしろまれなものである（Sheffer 2003）。これらの大半の民族的帰還者は、それまでは彼らの「故国」の土を一度も踏んだことがなかったにもかかわらず、その後に自分たちの父祖が生まれ育った国ぐにに「帰還」していったのである。そしてますます進行するグローバル化のなかで、ディアスポラの人びとが彼らの父祖の故国との関係を復活させることが可能となってきている。そしてそのような方法のひとつが移住である（Clifford 1994: 304）。民族的移住帰還という現象は1980年代 ── すなわち冷戦が収束しつつあり、ついには1991年にソ連が崩壊した ── にヨーロッパで生じてきた。1980年代後半にドイツのアウスジードラー（移住者：*Aussiedler*）は、かつての東ヨーロッパ（ポーランドとルーマニアを含む）の社会主義の国ぐにからドイツに帰還しはじめた。その後に多くのドイツ民族がカザフスタンのようなかつてソビエト連邦を構成していた共和国から帰還し、2000年初頭には300万人近くがドイツに再移住した。そして1990年代初頭から中ごろにかけて500万人近くのロシア民族も、新たに独立した中央アジアの共和国やウクライナのような東ヨーロッパの国ぐにからロシアに帰還した。これらの動向は、ソビエト分裂後にそれらの国ぐにに生じた経済的落ち込みや政治状況の悪化のみならず、ナショナリズムの勃興によるものでもあった。そしてさらに150万人を超えるユダヤ人も、東ヨーロッパやソビエトからイスラエルに移住してきた（Münz & Ohliger 2003; Remnnik 1998参照）。

* この論文を執筆するに当たっては韓国政府が設立した「韓国研究財団」（Academy of Korean Studies Grant）の援助をえた。

さらにまた、1980年代のラテンアメリカでの経済の落ち込みによって、スペインやイタリア、ポルトガルなどを民族上の出自とする人びと（彼らの祖先は何世代も前にこの大陸に移住した）も、ヨーロッパの父祖の故国に帰還移住した。ラテンアメリカからのこれらの連鎖移住者の一部は――父祖の故国たる日本に1980年代後半以降に帰還した――日本を民族的出自とする人びとであった（*Nikkeijin*）。近年ブラジルとペルーから30万人近い日系人が日本に帰還移住した（Tsuda 2003, 2009参照）。

韓国も同様である。1980年代初頭には一時的帰還と永続的帰還を含めて数万人の朝鮮民族が韓国に帰還した。過去25年間に中国から韓国へ60万人近い朝鮮民族（彼らは *Chosŏnjok* あるいは *Chaoxianzu* と呼ばれている）が、その他の国ぐにと同様な背景の下で帰還移民として流入している（Song 2009）。同じく中国は1980年代以降に、新たな改革開放政策によって経済発展をとげるのに合わせて民族的移住帰還者の流入を見た。多くの在外中国人が1980年代後半以降、とくに東南アジアや北アメリカから中国に帰還してきており、彼らは中国の経済発展に大きく貢献している。

上で見たように、何百万人にものぼる民族的移住帰還者が世界のあちらこちらの地域で現れてきている。それでは、ここ数十年の間になぜ民族的移住帰還という現象が生じたのであろうか。上述したように、政治的理由から民族的移住帰還が生じている場合がある。たとえば、1990年代以降に中央アジアからロシアに帰還したロシアの民族的移住帰還は、政治的な理由から生じている。カザフスタンやウズベキスタン、キルギスタン、タジキスタン、そしてトルクメニスタンといった、新たに独立をはたした中央アジアの国ぐにに勃興したローカルなナショナリズムは、ロシアに民族的出自を持つ者が彼らの故国へ帰還することを後押しした。同じく、ウクライナ居住の多くのロシア人たちは、ソビエト連邦崩壊後に民族主義的なウクライナ人によって、ロシアに帰還するように後押しを受けた。というのは、ロシア人たちはこれらの国ぐにおいては――彼らの父祖がロシア帝国とのちのソビエト連邦の領土拡張によってやってきた「植民者」（‘colonisers’）と見られていたためである。さらにまた、かつてのソビエト連邦やイスラエルへのユダヤ人の民族的移住帰還、さらには、東ヨーロッパの国ぐにや1980年代におけるその地域での社会主義体制の崩壊後のソビエト連邦からのドイツの民族的移住帰還などの背後にも、さまざまな政治的要素が控えている。

それにもかかわらず民族的移住帰還の大半の事例は、政治的な理由もさることながら主に経済的な理由から生じたものである（Tsuda 2009）。たとえば、東ヨーロッパとソビエト連邦からのドイツのアウスジードラーは、政治的理由とともに経済的な理由から生じたものである。1990年代に現れた、ラテンアメリカに居住するヨーロッパ系の子孫たちの、スペインやポルトガル、そしてイタリアといった父祖の故国への民族的移住帰還は、母国（natal homeland）の経済的な落ち込みと、彼らの民族的な故国の繁栄によって生じたものでもある。さらにまた過去30年間の、ブラジルやその他のラテンアメリカの国ぐにから日本への日系人の民族的移住帰還もまた、経済的な理由から生じたものである。ラテンアメリカの経済の停滞ゆえに日本へと移住するように日系人を後押しし、また同時に1980年代以降の日本における労働力の不足が彼らを日本に引き寄せ

たのである。日本での雇用機会の豊かさと賃金の高さは日系人の日本への移住を促した。このことは1990年代初頭以来の、中国から韓国への朝鮮族移民に関しても同様である。雇用の機会と、中国と韓国の間の賃金格差が父祖の故国への民族的移住帰還の主な理由である。

これらの民族的移住帰還は自然に生じたものではないということは重要なポイントである。すなわち民族的移住帰還を可能とする、背景となる明確なプロセスと要素が存在するのである。さまざまな要素のうちで国家の政策 ── なかでもディアスポラの包摂政策 ── がもっとも重要な要素のひとつである。受け入れ国の移民政策は、過去30年間に生じてきた民族的移住帰還に大きく貢献してきている。ドイツのような西ヨーロッパの民主主義国家における人道主義にもとづく移民政策は、ドイツ人だけではなく非ドイツ人移住者もドイツに移住することを認めてきた（Münz & Ohliger 2003; Skrentny *et al* 2007）。ユダヤ人を海外から受け入れるイスラエルの政策は、ユダヤ人が彼らの父祖の故国に帰還することを奨励した。とくにこの政策は、イスラエルの「帰還法」（Law of Return）によって支えられていた。この法律はユダヤ人に対して故国への帰還を認めるだけではなく、イスラエル国家に対してそのような移住を促進し、民族的移住帰還を支援することを義務づけている（Münz & Ohliger2003; Remnnick 1998; Joppke 2005）。同法はユダヤ人の配偶者やこどもたちもイスラエルに帰還することを認めていた。日本や韓国、中国のような東アジアの国ぐにはすべて、エスニックによって方向づけられた移民政策を採用しており、それがさらに民族的移住帰還を促したのである。これらの３カ国は、各々が労働力および／もしくは投資を必要とする場合に、民族的な出自を同じくするグループに対して帰還するように促したのである（Skrentny *et al* 2007）。

民族的移住帰還はめずらしい現象であるにもかかわらず十分には研究されていない。そのような国際的な移民形態の原因に着目した業績はわずかしかない（*cf.* Münz & Ohliger 2003; Tsuda 1999; Remnnick 1998; Fox 2003; Song 2009, 2015; Fox 2003; Tsuda 2010, 2009, 2003, 1999; Joppke 2005; Skrentny *et al* 2007; Song 2009）。そのような研究においては、民族的な故国における民族的移住帰還者の適応過程を研究する研究者もいる（Remnnick 1998; Tsuda 1999; Fox 2003; Song 2009, 2015）。さらにまた、民族的移住帰還のアイデンティティ問題に着目する研究者もいる（(Tsuda 1999; Fox 2003; Remnick 1998; Song 2009, 2015）。民族的移住帰還に関して研究者の関心をひく、もっとも興味深く重要な問題のひとつが、彼らの民族的な故国における民族的移住帰還者の間でのアイデンティティの変遷の問題である。民族的な故国における民族的移住帰還の移住経験に応じて、民族的移住帰還者の民族的およびナショナルなアイデンティティが弱まったり、強くなったりするということをそれらの研究は明らかにしている。彼らは、民族的移住帰還者と受け入れ社会における民族上の同胞との間に存在する階層的な上下関係を観察した。それらの関係は、送り出し国と受け入れ国との間での現存する国際的秩序に応じて決まってくるのである（Tsuda 1999a,b; Remnnick 1998; Lemish 2000; Seol & Skrentny 2009参照）。現代世界のディアスポラが有している複雑で流動的なアイデンティティを理解しようとするならば、これらの問題を探求することが不可欠である。

民族的移住帰還と移住に関するこれらの興味深い問題を考察するために、本稿では民族的移住

帰還者の移住と定着にかかわる経験にとくに着目しつつ、朝鮮民族の民族的移住帰還の問題を検討する。その際さらに、民族的な故国における朝鮮民族の移住帰還者の間での民族的およびナショナルなアイデンティティ（「故国」観念の変遷とともに）の変化をも検討する。換言すると、本稿では、韓国に移住帰還した朝鮮民族のディアスポラの間でのアイデンティティの変化と、定着経験および故国観念との間の関係について検討する。そしてその際本稿では、３つの朝鮮族の民族的移住帰還の事例を比較検討する。すなわち、1990年代以降に韓国に移住し、定着した韓国系中国人、ソビエト系韓国人、および韓国系アメリカ人という３つの民族的移住帰還である。

Ⅱ．ディアスポラ帰還者の故国とアイデンティティ

上でのべたように民族的移住帰還は多くの興味深い研究課題を提起している。なかでももっとも興味深い問題は、彼らの民族的な故国において、民族的移住帰還がディアスポラの移民の民族的およびナショナルなアイデンティティに対してどのような影響を及ぼすのかという問題である。民族的移住帰還を経験した後においても、彼らは同じアイデンティティを有しているのだろうか。この問題と関連してつぎのような問題も提起される。かりに民族的移住帰還が帰還者のアイデンティティの変化に対して実質的にも影響を与えるとするならば、そのような変化はなぜ、どのようにして生じるのであろうか。またさらに、異なった民族的移住帰還の間において、帰還経験とアイデンティティの変化に対してなにがしかの相違が存在するのだろうか。これらは、これまでにほんのわずかな研究者しか論じていない重要な問題である。

民族的移住帰還者は彼らの生国（受け入れ国）（natal homeland）において、通常は明確なアイデンティティを有している。そこではしばしば彼らは、定着してからの長さとは無関係に民族的マイノリティとして分類されている。たとえばアジア系アメリカ人は――彼らが数世代にわたって居住するかあるいは彼らの同世代のヨーロッパ系の移民よりも長く居住している場合であっても――ヨーロッパ系の主流社会からは、「アジア人」もしくは民族的マイノリティとして分類される傾向がある。このようなことがらは、彼らが「受け入れ」社会にどのぐらい居住しているかとは関係なく、彼らの出自を想起させるのである。たとえば、すでに３世代か４世代にわたってブラジルに居住しているブラジルの日系人は――日本人よりも後でブラジルに移住した――ブラジル人によって「ハポネ」（'Japonês'）と呼ばれている。他のブラジル人との文化的な相違に対する自己認識に加えて、日常生活においてこのように彼ら自身の民族性を保持している。このようなことは、日本に民族的出自をもつブラジルの人びとに「日本人」としての明確なアイデンティティを与えている。このようなことはオーストラリアやニュージーランドのような国ぐににおいても同様である。古くからの中国の移民は彼らの祖先が移住してからすでに150年以上経ているが、現在でも「中国人」として認識されている[1)]。

それにもかかわらず、そのような明確に保持されている民族的なアイデンティティも、彼らの民族的な故国において重大な変化を被ることもありうる。たとえば1980年代以降に日本に帰還した日系ブラジル人の民族的移住帰還者において、彼らのアイデンティティには重大な変化が生じ

ている。過去数十年の日本経済の成長の結果、1980年代に国内市場は労働力、とくに肉体労働者の不足に直面していた。労働力不足の解決策として日本政府は、ブラジルと他の若干のラテンアメリカの国から日系人の労働者を雇用することを決断した。日本政府は日系ブラジル人に対して、日本で働き、定住することを可能とする特別ビザを発給した。このような決断の背後には、日系人の労働者は同じ「日本人」であるゆえに日本社会の同質性をさほど害するものではないという、自民族中心的な思いこみが控えていた。その結果、約30万人の日系人の労働者が2000年の半ばごろまでには日本にやってきた。日系人労働者の視点からすると、日本は疑いもなく彼らの父祖の故国であり、したがって彼らは大きな望みと高まる感情を懐いて「帰国」したのである（Tsuda 1999）。

それにもかかわらず、彼らが懐いていた期待はまったく現実のものではないということがすぐに明らかとなった。日本にやってきて、多くは工業都市の工場で働きはじめてまもなく、巧妙な差別と社会的な疎外感を感じるようになった。彼らがありついた職は彼らの同胞労働者よりも低い賃金での、いわゆる「３Ｋ」（きつい、汚い、そして危険）の仕事であった。そして多くの場合、日系人の労働者は同胞とは異なる制服を着ていた。それは通常は、工場などに労働力を供給する派遣労働会社によって貸与されるものである。さらにまた、彼らの同胞たる同僚は彼らとの交流を望んでいないと感じた。日本人の正社員と日系人労働者は職場ではあまり付き合いがない、と津田は指摘している（Tsuda 2003）。昼休みでもそれぞれのグループは一緒に座ることはなく、別々のテーブルで食事をしている。日本人の目からすると、日系人労働者は日本語を話さず、また行動様式も通常の日本人とは異なっているのである。ある意味ではこれらの日系ブラジル人は、食習慣や服装、そして社会的慣行に関しては、むしろ「ラテンアメリカ人」に近く「外人」のようなのである（Tsuda 2003）。

仕事が終わった後も彼らは日本人同僚と交わることはない。日系人は移民労働者として通常は家賃の安い住居に住んでおり、したがって彼らは多くの工業都市の周辺に集住地域を形成している。日系人労働者やその家族は、日本のコミュニティにおけるよく統制された伝統的なライフスタイルに慣れていないので、地域社会においてもまたあつれきがある。たとえばゴミの再生利用は、日系人が暮らしている多くのコミュニティにおいて共通の問題である。多くの外国人にとって日本の優れたリサイクルシステムは、順応するのがむつかしい。とくに、日本のようには発展していないラテンアメリカの国ぐにからやってきた日系人にとってはそうである。これらの相違のゆえに、ブラジルやその他のラアテンアメリカの国ぐにからやってきた日系人は、彼らの同胞から偏見と差別の目をもって眺められることになる。彼らは外見上日本人のようではあるが、ブラジルからやってきた日系人は文化の面からすればブラジル人であって、通常はポルトガル語のみを話し、したがって彼らは日本人からはガイジンとみられるのである。

2007年から2008年にかけて日本経済が落ち込んでいた時には、日本政府は日系人労働者に一定の金銭を供与して本国に帰還させた。経済が落ち込み、国内の労働市場において失業率が増加する場合、日本はもはや日系人労働者を必要としなかったのである。日本政府は特別ビザを有する日系人労働者に、日本を去ってラテンアメリカに帰国することを推奨するために各人に約30万円

を供与した。このことから、日本の社会と政府とが民族的な視点にたっておらず、日本人と日系人との間の紐帯に意義を見いだしていないということが明らかである。そしてそのような政策の実行とともに多くの日系ブラジル人は日本を去りはじめ、日本中の日系人コミュニティの規模は小さくなった。そのような事態や彼らが日本で経験した差別的処遇によって、自分たちは日本の同胞とは非常に異なっていることを実感し、それとともに自分たちの真のアイデンティティははたして何なのかと自問するようになった。自分たちが日本人ではないとすればはたして何者なのか？ このような根本的な疑問が、ブラジルやその他のラテンアメリカの国ぐにからやってきた日系人の間で提示されたが、ブラジルからやってきた大半の日系人は自らのアイデンティティの基盤をブラジルに求めた。実際にも日系ブラジル人たちは、私生活においてのみならずたとえば日本のお祭りにおいても、自分たちはブラジル人であることを表明しはじめた。たとえば、彼らは――ブラジルではそのようなパフォーマンスを通常は行わないにもかかわらず――地域のお祭りなどでブラジルのサンバを踊りはじめた（Tsuda 1999b）。アイデンティティの対象たる国家として彼らが「ブラジル人であることを選んだ」のは、面積が広く多文化国家としてブラジルはさまざまな明確な特徴を有しているからである（Tsuda 1999b）。

日本において日系人が、真の「日本人である」ことを強く否定されたことから、ラテンアメリカからやってきた日系人の民族的移住帰還者は、日本人と日系人の間に一定の階層構造を作り出している。すなわち前者が明確に日本人として勝っており、民族的な階層構造において日系人よりも高い地位を占めているのである。しかしながらそれだけではない。民族的移住帰還は日系人移民の間においても、階層構造的な関係をもたらしていると主張する研究者もいる。竹中はブラジル系の日系人とペルー系の日系人の間に存在するそのような階層構造について指摘している（Takenaka 1999）。ブラジルとは異なりペルーは明確な特徴を有しておらず、日系ペルー人は自らを、ペルーおよび日本にいるペルー人の移民とは距離をおく傾向がある。彼らはペルーのような国民国家を自らのアイデンティティのよりどころとしては選択せずに、自らを「在外日本人」もしくは「日系」ということをそのアイデンティティと考えている（Takenaka 2009）。

日系人の事例は民族的移住帰還と帰還者のアイデンティティの複雑さを顕著に示している。しかしながらその他の国ぐにでの民族的移住帰還の事例も、同様なアイデンティティの変化と、異なった国ぐにから父祖の故国にやってきた同一の民族集団の間における階層構造的関係の存在を示している。民族的移住帰還者の間や、受け入れ社会における同胞との関係においても明らかに階層構造が存在する。もうひとつの事例は、ソ連からやってきたドイツのアウスジードラーの事例である。ドイツ語が離せないゆえに彼らは差別や孤立、周縁化を経験した。そしてこのことは――いかにそれがかすかな場合であっても――ドイツ人としてのアイデンティティをさらに弱めるのである（*cf.* Münz & Ohliger 2003）。より発展した西洋諸国からやってきたユダヤ人と比べて、ソ連からやってきたユダヤ人の帰還者は、彼らの民族的な故国において同じような偏見や差別を経験している（Lemish 2000; Remnnick 1998）。

ただしそのような民族的な階層構造は必ずしも常に偏見や差別を生み出すものではない。逆にそれは、より発展した西洋の国から帰還した人びとに対しては、尊敬や特権をも生み出している。

たとえば、豊かな西洋の国から帰還した民族的移住帰還者は、民族的な故国においてより専門性の強い職に就いたり、また、貧しい国からやってきた同胞よりもその地においてより尊重される傾向がある。日系アメリカ人の民族的移住帰還者は日本では――とくに彼らの英語能力と専門家としての資格ゆえに――より尊敬を集める仕事を携えて帰還している。そこで当然に、日系アメリカ人と日系ブラジル人の民族的移住帰還者の間には大きなギャップが存在する。同じく中国においても、ヨーロッパの先進国や北米から帰還した民族的移住帰還者は、中国人や、あるいはヴェトナムやインドネシアといった貧しい国から帰還した帰還者よりもより大きな特権を享受している。

民族的移住帰還後のアイデンティティの変化に関連する問題は、ディアスポラが有する「故国」の観念の問題である。故国の観念は一定の地域や土地に対する情緒的な愛着をともなっている。ディアスポラにとって故国の観念は一般の人びとの観念とは異なっている。それは――（彼らが外国人と考える人びとの間での）しばしば差別や憎悪をともなう――移民と定住の経験にもとづいている。彼らにとって、いづれの国を故国と考えるのかということは状況に応じて変化するものでもある。とくにディアスポラは、マジョリティの人びとから自らのアイデンティティを押しつけられており、したがって彼ら自身は自らのアイデンティティと故国の観念を戦略的に使い分ける傾向がある。自ら身に着けることができる多様なアイデンティティと故国の観念のなかから、有意義なアイデンティティと故国の観念を選ぶことによって、ディアスポラは自らの存在と人生を意味づけるのである。

次章では朝鮮族（Chosŏnjok）、コリョサラム（ソビエトの朝鮮族（Koryŏ saram））そして韓国系アメリカ人を例として、民族上のアイデンティティの変遷、故国観念の柔軟性および民族的移住帰還にかかわる民族的な階層構造について検討する。

Ⅲ．コリョサラムのディアスポラの帰還

移民の歴史

吉林省、黒竜江省、遼寧省という中国の東北３省（かつて「満州」と呼ばれていた地域）に今日居住する200万人の朝鮮民族は、19世紀に朝鮮半島から満州に移民してきた朝鮮民族の子孫である。朝鮮王朝は19世紀に政治的、経済的および社会的な混乱状態にあり、また19世紀中葉までに内乱や干ばつ、飢饉に見舞われていた。そのゆえに、とくに朝鮮半島北部から満州へと人びとは移民しなければならなかった。満州は強大な満州族の故国であり、彼らは17世紀に新王朝を打ち立て、漢民族や朝鮮人がその地域に入ることを認めていなかった。この政策のゆえに満州地域は極めて人口の少ない地域として取り残されていた。しかしながらその政策は後に撤廃されて、侵略的なロシアから満州を防衛するために1885年に漢民族と朝鮮族が満州地域に入ることを認めた（McKweon 2004）[2)]。

朝鮮民族は朝鮮のさまざまな地域からさまざまな時代に満州に移民した。初期の移民は朝鮮半島の最北部の貧しい農民であり、彼らは朝鮮と中国の国境たる豆満江（Tuman River）を超えて

満州南部の間島（中国語でJiandao）に定住した。朝鮮民族として20世紀初頭に満州に移住したより多くの朝鮮民族は日本の植民地下の人びとであり、これらの人びとのなかには貧困ゆえに移住した場合と合わせて、植民地支配を嫌って政治的理由から移住した人びとも含まれている。日本による満州侵略とそれに続く1932年の満州国建国の後には、朝鮮半島南部から移住してきた農民は広大な土地と豊かな資源を開発するために半ば強制的に日本政府によって移住させられたのである。

エスニック / ナショナルなアイデンティティ

満州への移民の当初から朝鮮族は「朝鮮民族」としての明確なエスニック / ナショナルなアイデンティティを有していた。そして植民地化以前の長い歴史と共通の文化を有する民族として、朝鮮民族も中国人もホブズボームが指摘する「始原的なナショナリズム」（'proto-nationalism'）を有していた（Hobsbawm 1997［1990］）。さらに、独自の教育制度のみならず自らの新聞や雑誌を朝鮮民族は有していたので、ナショナルなアイデンティティを強化するのを助けた。アンダーソンが強調しているように、出版資本主義（print capitalism）の役割はナショナル・アイデンティティの展開にとってはきわめて重要である（Anderson 1983）。後には、日本の植民地主義との戦いと新生中国の建設に参加することを通じて、彼ら朝鮮族は「中国」公民としての政治的アイデンティティを形成していった（Chŏng 1996）。したがって、朝鮮系中国人は朝鮮民族と中国公民という２重のアイデンティティを有するようになったのである（Kang 2008）。

1949年に中華人民共和国が建国されたときに新政府は、満州の朝鮮民族を中国公民と認定し、1952年には延辺朝鮮族自治州が創設された。このことによって韓国系中国人は、彼らの文化や言語、アイデンティティを ── とりわけ自治州として延辺の朝鮮族コミュニティは朝鮮語を使用することができ、また朝鮮民族学校を設立することができたがゆえに ── 維持する手だてを得た。ほとんどの朝鮮民族は民族学校に通い、したがって朝鮮民族のアイデンティティと文化が維持された。

冷戦時代には中国は北朝鮮を唯一の正統な朝鮮民族国家と認め、他方で韓国を正統性のない政治体とみなしていた。このような状況のなかで、韓国系中国人は北朝鮮とのみ関係を維持することができた半面に、韓国とは完全に絶縁状態であった。このような状況は冷戦状態が収束していき、また中国が外の世界に対して門戸を開きはじめた1980年代にはじめて変化した。1980年代半ばごろまでには韓国系中国人は韓国に関して ── 北朝鮮の貧困とイデオロギー的な過酷な状況と対比して ── より現実的な見方をするようになった。このような事態は、韓国系中国人がそれまで韓国に対して懐いていた否定的見方を修正させるようになり、1980年代後半には彼らは韓国を訪問しはじめ、その多くは移民労働者として韓国にとどまった。そして1992年に韓国と中国との正式な外交関係が確立されて以降より多くの韓国系中国人が韓国に移住した。中国文化と朝鮮文化の双方に精通しているゆえに彼らは容易に韓国で活動することができ、また彼らの多くは中国と韓国の間を行き来することによってトランスナショナルなライフスタイルを実践していた。

民族的移住帰還

このような朝鮮族の韓国への民族的移住帰還は、過去20年間の中国と韓国におけるマクロな経済的、政治 - 社会的な状況によって促進された。朝鮮民族が集住する辺境地域たる中国東北部の経済的衰退のゆえに、未熟練労働力を必要としていた韓国での雇用機会の豊かさ故に、朝鮮族は韓国に引きつけられた。韓国人は ── 数十年にわたって出会うことのできなかった中国に居住する同胞へのノスタルジアから ── 彼らを貧しい移民労働者と考えながらも、当初は好奇の目をもって眺めていた。

朝鮮族は1980年代半ば以前には韓国のことを多くは知らなかった。またたとえ知っていたとしても、彼らの知識は中国と北朝鮮の冷戦下においてゆきわたっていたプロパガンダによってゆがめられたものであった。朝鮮族が彼らの父祖の故国の経済的繁栄に注目しだしたのは、韓国で1986年に開催されたアジア競技大会と1988年の夏季オリンピックの終了後であった。彼らの多くは韓国の親族を訪問することに熱心であったが、当時の中国においては海外に出かけるのは容易ではなかった。さらにまた朝鮮族が韓国への入国許可を獲得するためには、韓国に居住する親族からの招待状が必要であった。しかし彼らと絶縁状態になって数十年がたっているので、それを得ることは容易なことではなかった。多くの朝鮮族が韓国を訪問することができるようになったのは、韓国と中国の間で正式の外交関係が確立する1992年以降のことである。彼らは職業訓練生や移民労働者、学生、旅行者そして韓国人の配偶者として韓国を訪問した。韓国にくると大半の朝鮮族は ── 中国で得るよりも20倍近くの給料を得ることができるので ── ビザの種類にかかわりなく職にありつこうとした。朝鮮族はすぐに、韓国における外国人労働者のなかでは最大の集団 ── 1990年代半ばまでには10万人を超え、2006年までにはおおよそ24万人に達していた。

以上のような大規模な韓国への朝鮮族の移住の背後には、韓国における豊富な雇用機会という状況が存在していることは明らかであるが、それに加えて改革開放後の中国社会の社会的、経済的変化という事情も控えている。多くの朝鮮族は漢民族との関係で、改革開放以後の中国において経済上の地位の低下を被っていた（Chŏng, 2000, p.93）。経済上の地位の低下は、延辺自治州内やその他の多くの朝鮮族の村での朝鮮族の政治的な疎外をも伴ってきており、そこでは朝鮮民族の人びとは漢民族移住者の増加によってマジョリティたる地位を失っていた。

満州移民の初期の頃から朝鮮民族と中国人の移民は、農業に関する背景の違いからしばしば異なったコミュニティを形成していた。稲作農業に従事する朝鮮族の移民は川沿いの低地地域に定住した（Chŏn, 1991, p.80）。それに対して、その多くが不毛の山東省からやってきた中国人の移住者は、小麦やモロコシといった乾燥地の穀物生産に従事していたので高地を選んだ。米作は中国東北地方ではより高収入を得ることができたので、朝鮮民族は ── 中国の全少数民族のなかではもっとも高い教育水準を誇っていた（To, 1992, p.169; Chŏng, 2000; Kim, 2003, p.110）── 中国人隣人よりもよりよい生活を送っていた（Lee, 1986; Hoffmann, 1986; Chŏng, 2000）。しかし1980年代半ばまでには朝鮮族は、彼らの社会 - 経済的地位が漢民族と比較して落ち込んでいるということを実感していた。延辺の経済発展のスピードは中国の他の地域よりも遅かった。これは主として1980年代における中国の都市部と農村部における発展の不均衡が原因であった。それに

加えて朝鮮族の経済的な地位は、中国東北部において漢民族の地位と比較して低下していった。というのは、朝鮮族が米作に固執したのに対して、漢民族は商業穀物を栽培したり小さなビジネスを営むなどして経済活動を多様化していったからである（Chŏng, 2000, p.93）。

さらに1980年代から90年代を通して朝鮮族は、自分たちのコミュニティのなかにおいてもその政治的地位が低下していると感じていた。彼らは漢民族と平等な権利を享受してはいたが、政治的には完全に漢民族に支配されていた。このことはとくに――少数民族が大躍進運動や文化大革命といった過激な左翼主義者の支配に苦しんだ――1960年代と1970年代においてそうであった。近年朝鮮族のインテリたちは歴史意識や朝鮮族のルーツの探求へのノスタルジアを示している（Lee, 2005, p.111）。

自らの故国の外で困難を感じ、また豊かな母国の存在を知っている場合、人びとはとくにノスタルジアを強く懐くようになる。1980年代後半までには、多くの朝鮮族は違法な手段によってでも韓国で職を探し求めようとする準備は整っていた。大金を携えて韓国から帰国した朝鮮族の多くの成功物語は、彼らの間での「コリアン・ドリーム」を刺激した。

1980年代に朝鮮族が韓国居住の親族を訪問しはじめたときに、彼らの多くは中国に持参した生薬を売って財を成している。彼らが街頭で薬を売っていると、好奇心が強く、彼らに同情的な韓国人がそれらを購入した。生薬販売の成功物語は中国の朝鮮民族コミュニティに広がり、さらに多くの朝鮮族が韓国に行くようになった。彼らは中国におけるよりも少なくとも10倍から20倍の稼ぎがあるために、多くの朝鮮族が職を求めた（Im, 2003, p.293）。さらにまた多くの韓国の工場経営者が中国に工場を移転するにつれて、彼らもまた韓国と中国の双方を知っている彼ら朝鮮族に対して雇用の機会を提供した。このような経験はさらに彼らがよりよいチャンスを求めて韓国に行くことの動機づけとなった。韓国の雇用主は朝鮮族が朝鮮語を話すことができるがゆえに、他の国の外国人よりも朝鮮族を好んで雇用した。

故国、階層構造およびアイデンティティ

朝鮮族は韓国への民族的移住帰還の以前には、父祖の故国に対するノスタルジックな愛着の念を募らせていたのに対して、韓国人もまた中国に居住する彼らの民族的な同胞に対してロマンティックな感情を沸き立たせていた。第一に、朝鮮民族は韓国民に関する本質主義的／根源的な観念を有しており、朝鮮民族の「血統」にもとづいて朝鮮民族を定義している（Shin 2006）。すべての朝鮮民族は朝鮮国家に対してのみ忠誠心を抱いていると相当な期待をもっているゆえに、朝鮮民族は民族上のアイデンティティと国民としてのアイデンティティを区別しない傾向がある（Jeon 2005: 129）。したがってエスノナショナルな議論においては、朝鮮民族のディアスポラは国民の重要な一部をなすものと考えられている。とくに韓国人は、朝鮮族が朝鮮語と古来からの朝鮮族の伝統を維持して来たという事実を好意的に理解している。韓国のナショナリストによってなされた歴史編纂においては、朝鮮族が担った植民地時代の英雄的な反日闘争について顕彰している。またさらに多くのインテリや活動家たちは、朝鮮族は国家統一において重要な役割をはたすという考えをも抱いている。しかしながらこれらの肯定的な見方や期待は、韓国人が1990年

代に大規模な朝鮮族の韓国への民族的移住帰還に遭遇すると大きく変化した。

中国からやってきた「兄弟」に対して当初期待感や好奇心、同情心などを抱いていたが、多くの韓国人は、韓国において多くの朝鮮族の民族的移住帰還に遭遇して、彼らに対してアンヴィヴァレントな態度を取るようになった。1990年代初頭を通して、韓国のメディアでは朝鮮族に対する否定的な報道が増えていった。朝鮮族の被雇用者に対する韓国の雇用者の批判も増大していった。社会主義体制からやってきた朝鮮族は、韓国のような資本主義社会の生産労働には不向きであって、「職業倫理が弱い」とか「金銭にしか関心がない」、また「信用できない」などが大方の見方であった（U & Han, 2002; Yu, 2002）。朝鮮族は「信用できない」というそのような批判は、中国における韓国人の雇用者も同じく懐いていた。さらにまた、彼らは態度だけではなくナショナルなアイデンティティにおいても、完全に「中国化」されているということも批判された。朝鮮民族であることというのは、たんに民族的なものだけではなく文化的なものでもあるということを前提としていた。またさらに彼らは「朝鮮民族」は朝鮮語を話し、朝鮮族としての明確なアイデンティティを有していなければならないと確信していたのである。

韓国人が朝鮮族を彼らと同じ「朝鮮民族」としてイメージできないとすれば、はたして朝鮮族はいかになすべきであろうか？ 韓国にやってくると朝鮮族は社会にいかに適応すべきかという問題に直面し、彼らの多くは中国在住時と比較して地位の低下を被った。韓国では彼らは建設作業や工場労働、家事の雑用などの、地元の人びとが通常は嫌うような肉体労働に従事しなければならなかった。韓国の給料は中国よりもかなり高いが、朝鮮族の労働者は経済的に周縁化されていることを認識し、また韓国での彼らの生活条件はみじめなものであった。そのようなみじめな状況の故に彼らは、給料は低いが中国における生活の方がより人間らしいものであると考えるようになった。

韓国に移住した朝鮮族にとってのより困難な問題は、韓国同胞から受けた偏見と差別である。朝鮮族は、アメリカや日本のような裕福な国以外からやってきた在外朝鮮民族に対する韓国人の差別にはとくにフラストレーションを感じた。韓国でそのような否定的経験をすることで、朝鮮族は韓国に対して批判的な感情を募らせた。そしてそのような批判的な感情は、1990年代半ばごろまでには中国の朝鮮族社会のなかに広まっていった。そして朝鮮族の人びとは、彼らのアイデンティティと、ふたつの異なった故国――すなわち民族的な故国としての朝鮮と生国としての中国――に関して認識を改めるようになった。

韓国での差別や疎外、そして潰えた「コリアン・ドリーム」の経験は、朝鮮族の民族的移住帰還者を韓国に関して批判的にしたばかりではなく、彼らの「故国」と「朝鮮族」であることの意味に関する再考の機会を提供した。そのような民族と生国に関するアイデンティティに関する再考は1990年代半ばに頂点に達していた。すなわち、その問題に関する何冊かの書物と論文が、中国と韓国の双方において朝鮮族によって刊行されたときである。「故国」に関する大半の議論において、朝鮮族は民族的な故国としての朝鮮（彼らの民族的集団の出自）と、中国という受け入れ国たる故国（そこで彼らは「生まれ／子孫を生み出した」）を区別した。これらふたつの故国の間で、韓国での失意に満ちた経験ののちには、中国という「育み／受け入れ」てくれた故国を優先

させるようになったのである。

Ⅳ．コリョサラムのディアスポラ帰還

移民の歴史

極東ロシアへの初期のころの朝鮮民族の移民と満州への朝鮮民族の移民との間には多くの類似点が存在している。移民の多くは鴨緑江によって満州とロシア極東地域と境界を接する朝鮮半島北東の先端部（威鏡北道（North Hamgyŏng Province））からやってきている。朝鮮半島側においては、19世紀を通じて政治的、社会的、経済的な危機的状況であったのに対して、川を挟んだ対岸地域には人口がまばらな広大で肥沃な土地が広がっていた。彼らは朝鮮民族の季節農民であった。すなわち――1880年代までは朝鮮民族と漢民族の定住を禁じていた清政府の政策にもかかわらず――川を渡って土地を耕し、そして収穫期が終わると朝鮮側に戻っていった。ロシア帝国が北京条約によって1860年にロシア極東地域を獲得したころまでには、その地域にはすでに多くの朝鮮民族の家族が定住していた。そして朝鮮半島北部に起こった干ばつによって、より多くの朝鮮民族がその土地に移住していった。貧しい朝鮮民族農民にとって極東ロシアの土地は、米作を含む農耕を行うのに適した土地として多くの農民を引き付けた。その地域への朝鮮民族農民の移住はさらに続き、日本が朝鮮半島を植民地化した1910年までにはすでに５万４千人の朝鮮民族が定住していた。朝鮮民族農民は米作に成功し、その地域におけるロシア帝国の移民政策――ロシアが新たに獲得した領域への朝鮮民族の移民を抑制する場合もあった――を通じて、朝鮮民族農民はその地域の開発を推し進めるものとして総じて歓迎されていた。

ソビエト連邦成立ののちにおいては――スターリン主義政府によって極東の朝鮮民族を中央アジアに強制的に移住させることが決定された――1937年までは朝鮮民族の人口は増え続けていた。このような強制移住が突然かつきわめて非人道的に行われた結果、その過程においておよそ１割の朝鮮民族人口が減少した。そしてそのような強制移住の背後には、政治的（反日活動行うことで朝鮮民族が日本人を刺激しないように）および経済的（ヒトラー率いるドイツとのまじかに迫った戦争に備えて中央アジアの農業を振興すること）動機が存在した。しかしながらその過程において、彼ら朝鮮民族は「敵性国民」というレッテルを張られ、ソビエト市民としての権利をはく奪された。強制移住と「敵性国民」というレッテルを張られたというスティグマの経験は、コリョサラムの心の中に癒されることのない傷跡を残した。ソ連における朝鮮民族のこのような過酷な処遇は、コリョサラムのディアスポラの移民史を中国や日本、アメリカなどの他の朝鮮族ディアスポラの歴史とは異なったものにしている。

コリョサラムは「遺棄された」に等しいカザフスタン南部やウズベキスタンの荒野において、新しい生活を立て直さなければならなかった。彼らはほかの地域や町に移動したり訪問したりする自由をまったく有していなかったので、農業に専心し、その結果そこそこに成功するようになった。彼らは多くの集団農場を創設し、そのうちの多くはソビエトではもっとも成功した農場となった。タシュケント近郊の*Politodel*のような朝鮮民族の集団農場は、ソビエト中でもっとも豊

かな農場として有名となり、コリョサラムは彼らの農業の成功を誇りにしていた。彼らは1953年にスターリンが死亡したのちにはソビエト市民としての権利を取り戻した。この時からコリョサラム出身の学生は彼らの地区以外の学校に入学することができるようになり、このことによってソビエト全体、とくにモスクワのような大きな都市における朝鮮民族の人口が増大した。このような状況とともにコリョサラムの社会的地位は全般に上昇していき、科学者や学者、技術者、スポーツ選手、官僚、そして政府や政党のリーダーなどを含む多くの専門家を輩出した。

しかしながら、彼らにとってもうひとつの大きな運命的なできごとがソビエト連邦が崩壊した1992年に到来した。中央アジアに位置するソ連の共和国が独立したので、ローカルなナショナリズムが強化され、その地域の言語を話せない人びとは彼らの専門職、とくに教育を含む公共部門においてその地位を維持することが認められなかった。彼らの多くはエリートとしての地位を失い、地位の大きな失墜を被った。そして彼らの多くは私的な実業界、とくに1970年代にはすでに多くのコリョサラムが従事していた、市場向けの野菜の栽培業に転向した[3)]。上で言及したようにロシア人は民族的移住帰還者としてロシアに帰還した。新たに独立したこれらの中央アジアの共和国を後にしたのは彼らロシア人だけではなかった。ドイツに民族的出自をもつ人びとも移住者として故国に帰還したし、またポーランド人を含むその他の民族も帰還した。このようなことは、地域の言語を話せないがゆえにソビエト朝鮮民族を困惑させたが、はたして彼らはそもそも「帰還」できる「故国」を有しているのであろうか？

エスニック / ナショナルなアイデンティティ

極東ロシアに移住した初期の頃からコリョサラムはロシア人を、発展した西洋の文化を学ぶべき文明化されたキリスト教徒と考えていた。すでに移民の初期段階から朝鮮民族の大半はロシア人に従って正教会の信者となっていた（そのような改宗はある意味では朝鮮民族が極東ロシアに居住するための前提条件でもあったのではあるが）。いずれにしろロシア人は朝鮮民族が移住して暮らす土地の支配者であった。そのような思いを彼らはずっと懐いていた。ソビエト時代にはコリョサラムのアイデンティティはより複雑なものであった。延辺自治州として独自の民族社会を形成した中国の同胞とは異なり、コリョサラムはそのようなぜいたくなものを有してはいなかった。そして彼らは国家権力によって故国たる極東ロシアから悲劇的な強制移住を強いられたのである。スターリン体制下での極東ロシアの故国から中央アジアへの強制移住という1937年の悲劇的な強制移住の経験は、とくに自分たちは民族的なマイノリティであるという感覚を与えた。このことから、彼らは生活のためのみならずスターリン体制下で彼ら集団全体が生きていくためにも懸命に働いた。とくに彼らは強制移住の時には「敵性国民」という汚名を国家によって着せられていたので、コリョサラムは彼らの忠誠心と中央アジアでの有用性を証明することが必要であった。そして彼らは中央アジアでの農業の成功によって模範的なマイノリティという名声をほどなく取りもどしたのである。

ウズベキスタン人やカザフ人、タジキスタン人、その他の半遊牧民的なトルコ民族を含むさまざまな人びとととともに中央アジアで暮らしたことによって、コリョサラムは独特の集団的アイデ

ンティティを獲得した。中央アジアは優勢なロシア人によって植民地化されており、彼らは中央アジアにおけるトルコ民族やその他の人びとに対するロシア人の対応の仕方を学んだ。コリョサラムにとってはロシア人は文明化された強力な「ヨーロッパ人」であるのに対して、中央アジアの人びとは彼らが学ぶべきものを有しない非文明的で弱小民族であった。そのようなコリョサラムの態度は、1990年代にタシュケントやアルマ・アティ（Alma Aty）の彼らのコミュニティを調査した若干の研究者によって記録されている（Yoon 2014参照）。コリョサラムは中央アジアにおける人びとの間の階層構造をある程度受け入れていた。すなわち、トップとしてのロシア人とドイツ、ポーランドなどのヨーロッパ人、そして下層階層としての中央アジアの半遊牧民の人びとである。朝鮮民族はその中間に位置していたのである。

しかしながらコリョサラムがいかに「ロシア化」したとしても、彼らはソ連で居住する間は彼らの生活様式を通じて朝鮮民族としての明確なアイデンティティを維持していた。「朝鮮民族」としてのアイデンティティを維持することに役立ったのは、ロシア人やその他の中央アジアの人びとを含む、ソビエトの人びととの民族的な違いであった。彼らは容易に朝鮮民族と識別されるので、ロシア人からも中央アジア人からも常に「朝鮮人」('Koreans') と呼ばれていた。しかしながら文化的には ── とくに、後の世代の多くの人は彼らの母語たる朝鮮語を喪失してしまったので ── 朝鮮人としてのアイデンティティは弱かった。カザフスタン南部のクズロルダ（Kzyl-Orda）やウズベキスタンのタシュケントといった、朝鮮民族が集住している地域にある朝鮮民族の集団農場には教育程度の高い多くの朝鮮民族が暮らしていた。文筆家や音楽家、俳優などの文化的エリートたちが「朝鮮民族の」文化をリードしていた。しかしながらコリョサラムの大半の人びとにとっては、「朝鮮民族であること」は彼ら自身もその伝統をあまり理解していないような何物かを象徴するものに過ぎなかった（Yoon 2014）。

コリョサラムは中央アジア民族が文化的には下位の存在であることを認識しているので、彼らは居住地のローカルな言語や文化的慣行を学ぼうとはしなかった。しかしながらこのことは、新たに独立した中央アジアの共和国が突然に、政府やその他、大学などの公的機関の専門的な被雇用者はローカルな言語に熟達していることが求められるようになって深刻な問題となった。したがって彼らは当時の職を辞して、あらたな生活の糧を見出さなければならなかった。このことから、中央アジアのこれらの国ぐにおける不安定な経済的、政治的な状況のゆえにも共和国を去ることを後押ししたのである。

民族的移民帰還

上述したように、1990年代初頭に中央アジアのコリョサラムはつぎのような光景を目の当たりにしていた。すなわち、彼らの居住地においてローカルなナショナリズムが勃興した結果、ロシア人やドイツ人、ポーランド人などが中央アジアを去って彼らの民族的な故国に「帰還」しているという状況である。しかしながら彼らの間では韓国への民族的移民帰還は直ちには生じなかった。その理由は第一に、中国と韓国の間の距離がわずかであるのに対して、中央アジアの共和国と韓国の間の距離は非常に大きいこと。そして第二に、1990年代初頭と半ばにおいては、韓国政

府が彼らを移民として扱うプランを有していなかったことである。

したがって、中央アジアへの最初のコリョサラムの大規模な移住は、1990年代初頭におけるロシア極東地域への移住であった。実際にも極東ロシアは――彼らの父祖が1937年の悲劇的な強制移住以前に居住していた――彼らの「故国」であった。極東地域とくにウラジオストクは彼らがかつて自分たちの新聞や学校、劇場、そして農場を有していた地域であり、彼らの祖父母が生まれた地であった。この地はとりわけ彼らが真の「母国」たる朝鮮に容易にたどり着くことのできる地であった。コリョサラムは極東に移住しはじめ、そして彼らの多くはそこでの生活の方がより良いものと考えていた。毎年数千人のコリョサラムが都市近郊地域とともにウラジオストクやナホトカのような都市に移動した。ロシアと韓国、そして日本との間の関係が改善され、韓国や日本の企業がその地域に投資したならば雇用のチャンスが生じるかもしれないと期待していた。しかしながら期待通りにはいかなかった。その代わりにその直後に韓国において、移住したコリョサラムのために極東ロシアで大規模な農業コミュニティを建設する計画を有する企業家がいた。1990年代を通じて極東ロシアのあちらこちらに――多くの場合に経済的な利益を見込んだ地方政府の援助を得て――いくつかの農場やコリョサラムの村が設立された。それにもかかわらずそのようなプランはそれほど多くは成功しなかった。それに加えて移住者たちは、極東ロシアの気候は中央アジアほどには農業に適したものではないことを認識した。そのゆえに彼らのなかでは中央アジアに戻ったり、農業により適したロシア南部やウクライナに再移住することを選ぶ者もいた。

1990年代にウズベキスタンから韓国にやってきて成功した者もいた。さらに彼らに続く者があらわれ、コリョサラムの韓国への帰還者の人口が徐々に増加した。とくに、韓国人男性と結婚した若い女性がいた。国際結婚がなされていた初期のころには、朝鮮民族ではない花嫁よりも朝鮮民族出身の花嫁を韓国人は好んだので、ウズベキスタンからやってきた朝鮮民族の花嫁が人気があった。1997年には韓国のテレビ局がタシュケントからやってきたコリョサラムの女性と結婚した韓国のいなかに住む男性のドキュメンタリーを作成した。

しかしながら彼らの「故国」との遭遇は朝鮮族のようには積極的ではなかった。とくに彼らは朝鮮語を話せいないために韓国に住むことは困難であった。

故国、階層構造、そしてアイデンティティ

コリョサラムの民族的移住帰還者は中国からの帰還者と比較すると、その仕事において賃金が低いのが通常である。初期の頃の朝鮮族の民族的移住帰還者は韓国の建築現場か朝鮮民族のレストランで働いていたが、コリョサラムは朝鮮語が話せないのでそのような仕事を得ることができなかった。彼らは通常――韓国人が“arŭbaitŭ”（ドイツ語の*arbeit*――仕事、労働）と呼ぶ――パートタイム、非正規労働に従事していた。コリョサラムはしばしばインドネシアやスリランカ、カンボジアなどからくる朝鮮族以外の労働者と同じく朝鮮族の監督の下で働いている。

朝鮮族の大半は元々朝鮮半島の平安道から移民した人たちであるゆえに、コリョサラムと関係が深い。後には、一方は中国人、他方はソビエト人という異なった国民になるのであるが、彼ら

は元々同じ方言を使い、また共通の食文化を有していた。韓国へのコリョサラムの民族的移住帰還者20名へのインタヴューを行った際に興味深かったのは、彼らの大半が中国からの同胞に対して（韓国人に対してよりも強い）憤りを表明していたことである。その理由はふたつあるだろう。第１は、韓国の工場あるいは建設現場で朝鮮族の監督の下で働いている間に、コリョサラムの過酷な扱いゆえに朝鮮族への憤りを募らせたか、あるいは、一般にロシア人はソビエトと中国の間のイデオロギー的および国境をめぐる争いのゆえに、中国人に対して憤りを感じ、恐れてもいたところから、ソビエト時代の中国や中国人に対する否定的な教育のゆえにであろう。

いずれにしてもコリョサラムの帰還者は、韓国人、朝鮮族そして彼ら自身という、異なった「朝鮮民族」の間の階層的な関係を理解しているようである。しかしながら彼らは、そのような階層関係を認め、納得するよりはむしろ、自分たちが「朝鮮人」であることを否定する傾向がある。インタヴューのなかでコリョサラムの民族的移住帰還者は、自分たちは韓国への「民族的移住帰還者」ではないと話す傾向がる。彼らは文化的にも社会的にも韓国とは大きく異なっているので、「韓国人」としてではなくインドネシアやカンボジア、フィリピンのような国ぐにからの移民労働者のように、「外国人」として韓国にやってきたと答えている。彼らの大半は自らを「韓国人」とはまったく考えていないようである。彼らは自らのアイデンティティを尋ねられると、その多くは心情や文化においてより「ロシア人」に近いと答えている。彼らはまた韓国を故国とは考えておらず、自分たちの故国はウズベキスタンあるいはロシアであると多くの者は語っている。また「極東ロシア」が故国であると答えた者もいた。

コリョサラムの言語生活だけではなく食生活を見ても、実際に彼らはきわめて「ロシア的」で「中央アジア的」である。彼らはキムチのような朝鮮族の食事ではなく、常にサラダやパンを食べている。ソウルの南大門地地域には若干のコリョサラムのレストランがあり、その典型は ”My Friend” や “Ariran”（韓国では “Arirang”）のようなレストランである。しかしながら、現在の韓国在住の韓国人（あるいは北朝鮮人）であればおよそ韓国のものとは認めないような代物である。右の写真からわかるように、キムチのかわりにニンジンサラダや海藻サラダを食べ、また必ずパンを食べている。彼らの食べ物や文化は、想像上の朝鮮、ロシアそして中央アジアがまじりあったものである（Song 2016）。

写真１　コリョサラムのティーと「ニンジンサラダ」

写真２　コリョサラムの海藻サラダ

これらのことがらは、元々は朝鮮半島北部地域からやってきた朝鮮族とコリョサラムというふたつの朝鮮民族のディアスポラ集団が、自らの文化と言語においていかにドラスティックな変化を遂げたかを示している。これらの変化のゆえに彼らはまったく異なったアイデンティティを獲得しているのである。

Ⅴ．韓国系アメリカ人のディアスポラ帰還

移民の歴史

アメリカへの朝鮮民族の移民はサトウキビのプランテーションで働くために101人の朝鮮民族がハワイにやってきた1903年にはじまった。それに続く２年の間にさらに多くの朝鮮民族がハワイにやってきて、1905年――すなわち日本が韓国の外交権を剥奪した後に朝鮮民族のハワイへの移民を日本が停止させた年――までには7000人を超える人びとがいた。他のアジアの国ぐにからアメリカにやってきた多くの移民と同様に、これらの朝鮮民族は財を得たら故国に帰還することを望む「滞在者」（‘sojourners’）であった。そして彼らの多くは独身男性で、まもなく彼らは朝鮮から1000人を超える「写真花嫁」（‘picture brides’）を呼びよせた。彼らは家族を形成したので、これらの朝鮮民族がアメリカの第１世代の永住者となった。その後、鉄道建設部門や果樹園で働いてよりよい給料を得るためにカリフォルニアに移った者もいた（Patterson 1976）。

第２次大戦後にさらに大規模なアメリカへの移民がはじまった。1945年から1948年までアメリカ軍が朝鮮半島の南半分を支配した。朝鮮戦争（1950-1953年）後には約４万人のアメリカ兵が韓国に駐留したが、それはアメリカ兵と韓国女性の間での結婚を促した。これらの時期においては、韓国の花嫁と戦争孤児がアメリカへの主たる移住者であった。1950年から2000年の間に10万人以上の女性がアメリカ兵の花嫁としてアメリカにやってきた（Yuh 2002）。同じ時期により多くの養子が韓国からアメリカに渡った。兵隊の花嫁と養子のいずれもがアメリカ全土に分散していったので、民族集団として故国とのつながりをたどることはできなかった。しかし最近彼らは連携して朝鮮民族としてのアイデンティティを積極的に推し進めている。韓国政府もまた彼らの組織化と朝鮮民族としてのアイデンティティの強化を後押ししている（Song 2014）。

1965年のアメリカの移民法の改正はより多くの朝鮮族の移民に門戸を開いた。アメリカの兵士と結婚した朝鮮族の女性は彼女らの家族をアメリカに呼びよせることができたが、このことは韓国系アメリカ人の分母を大きく拡大した。1970年代から1980年代を通じてアメリカへの韓国人移民の数は急速に増加し、1990年代の終わりには100万人に達していた。とくに従来からの移民とは異なり、1970年代と1980年代にアメリカに移民した韓国人は高等教育を受けた中産階層を含んでいた。今日ほぼ200万人の韓国系アメリカ人がいるが、韓国からの移民の数は21世紀には漸次減少してきている。アメリカへの韓国移民の多数は食料雑貨店やドライクリーニング、レストランなどの自営業主である。英語能力が限られているので韓国人は高給のホワイトカラーの職につくことができないので、彼らは自営業を選ぶ傾向がある。アメリカにおける韓国人の移民に対するメディアのイメージは、成功した自営業者というものではあるが、それにもかかわらず韓国系アメリカ人の収入のレベルは高くはない。韓国人はアメリカにおける他のエスニック集団よりも教育水準は高いが、平均収入は中国人や日本人、インド人、フィリピン人などよりも低い。

アメリカでの収入のレベルが相対的に低いのとはかかわりなく、韓国人は高い教育レベルを維持している。そして移民の第二世代は投資としてまた第一世代の犠牲の上で、高い教育を受ける傾向がある。彼らのなかから徐々に専門職に就く者や政治家なども生まれている。韓国系アメリ

カ人の約70パーセントがロサンジェルスやニューヨーク、シカゴ、アトランタなどの大都市に住んでいる。それは大都市が教育と小売業にとってよりよい機会を提供するからである。

エスニックなアイデンティティ

韓国系アメリカ人のアイデンティティ問題は、中国や日本、そしてソビエトに居住する同胞のアイデンティティ問題よりも単純である。これはアメリカのリベラルな民主主義的社会、政治形態のゆえにであって、エスニックマイノリティ集団が自分たちのエスニックで文化的な伝統やアイデンティティを維持することを容認するがゆえにである。日本や中国、ソビエトにおけるのとは異なり、アメリカの韓国人（およびその他のエスニックマイノリティ集団）は自由に彼らの文化や伝統を表現し、維持することができる。そしてそのことから自らが韓国人であることを誇りに感ずるようになるのである。たとえば日本においては、韓国人が帰化するために自らの国籍を捨てて日本の国籍を取得した場合には彼らは通常罪悪感を感じる。それは、彼らにとってエスニシティとナショナリティが同じであると考えられているからである。それに対してアメリカにおいては、エスニックマイノリティはアメリカ市民権を獲得し、彼らのナショナリティと市民権を放棄しても罪悪感を感じることはない。というのは彼らにとってはエスニシティとマイノリティは異なったものだからである。したがって韓国系アメリカ人は健全でポジティヴな「韓国系アメリカ人」といアイデンティティをもっているのである。しかしながら過去においては、韓国系アメリカ人は劣等感を持ち、韓国人であることを恥じていた時代があったが、それは国家間における国際的な序列のなかで韓国の地位が低かったからである（Kim 2003）。

しかしながらアメリカにおいても、彼らもまたアメリカ社会内での社会的差別を十分に認識し、感じている。アメリカはヨーロッパ系の白人が支配的集団たる国であるゆえに、韓国人は（そしてその他の非白人の人びとも）アメリカでの居住の長さとは関係なく、常に彼らのエスニシティによって把握されている。そして世代間においてアイデンティティのなかみが大きく異なっている。第一世代の韓国人は自らを「韓国人」と強く感じているが、第二世代以降の人びとは韓国人としてのアイデンティティは弱い。このことは彼らが韓国語をうまく話せない場合にとくにあてはまる。1990年代半ばの韓国系アメリカ人のコミュニティに関してユンはつぎのように指摘している。すなわち、若い世代の韓国系アメリカ人はたとえ韓国語がうまく話せなかったり、韓国の伝統をよく理解していなかったとしても彼らは韓国に対して強い帰属感を有しており、また韓国人であることが日常生活において重要な意味を有しているのである（Yoon 2003）。しかし総じて韓国系アメリカ人は、「韓国系アメリカ人」であることを誇りに感じており、このことは彼らの民族上の故国への民族的移住帰還に影響を及ぼしている、と。

ディアスポラ帰還

帰還の主たる理由が経済上の理由である韓国系中国人やコリョサラムの民族的移住帰還とは異なり、韓国系アメリカ人の民族的移住帰還はより文化的、教育的な理由であることが多い。韓国系アメリカ人の民族的移住帰還のもっとも典型的なパターンは「故国訪問」（“homerland tour”）

で、若い韓国系アメリカ人が韓国の文化やことばを学ぶために父祖の故国を訪問するのである。多くの韓国系アメリカ人の若者は通常は大学生の時にこのような故国訪問を行っている。1970年代と1980年代にきわめて多くの韓国人がアメリカに移住したので、1990年代から2000年代の頃までには旅行者や学生として韓国を訪問した多くの韓国系アメリカ人の若者がいた。そのような若者の要求を満たすためのさまざまなサービス業が立ち上げられ、そのなかには大学での初級の韓国語教育センターの開設も含まれている。これらの韓国系アメリカ人の故国訪問者は多くの場合英語教師として働いている。

さらにまた若い韓国系アメリカ人の帰還者もおり、彼らは民族的な故国での仕事を求めている。英語教師の仕事は韓国では多くあり、またさらにその他の多くの仕事とくに専門職を得る機会も多く存在する。韓国系アメリカ人の若者は通常は高い教育を受けている。そして、多くの場合にいわゆる３Ｋの職種で肉体労働に従事している韓国系中国人やコリョサラムの民族的移住帰還者とは異なり、彼ら韓国系アメリカ人は高賃金のホワイトカラーのしごとについている。実際にも1990年代には韓国系のディアスポラが多く存在し、彼らは職を求めて韓国にやってきている。1990年代は韓国における「移民の転換点」であり、それ以後は韓国を去る人口よりも韓国に帰還する在外韓国人の方が多く存在するということを意味している。

雇用の機会以外で、韓国系アメリカ人やその他の移民が韓国に民族的移住帰還をする背景には、ディアスポラの包摂政策を採用した韓国政府の存在がある。1990年代初頭以後に韓国政府は韓国系の在外ディアスポラに注目しはじめた。世界中に存在する750万人の有力な韓国系ディアスポラを援助するために、韓国政府は在外韓国人財団のような新たな組織を立ち上げた。1999年に政府は彼らの地位や朝鮮民族に対する入国ビザに関する新たな法律を制定し、在外韓国人に対して実質上の市民権を付与した。現在朝鮮民族は韓国を訪問・居住し、銀行口座を開設し、ビジネスをはじめることができる。このような政策は朝鮮民族に対して故国を「回想」させるだけではなく、「韓国人」としての彼らのアイデンティティをも再び強固なものとした。これは韓国系のディアスポラの間での韓国語教育を援助することや彼らの父祖の故国に招待し、また訪問することをも含んでいる。さらにまた、海外の韓国人の養子に対する故国訪問プログラムを立ち上げたのはこのような文脈の下においてである。毎年夏には養子となった韓国系の人びとが故国の文化遺産を学ぶことができるように韓国に招かれている。さらに韓国政府は海外のすべての韓国系ディアスポラのためにネットワークの構築に努め、それ以来多くの民族的なネットワークが立ち上げられている（Song 2014）。

アイデンティティ、故国、そして階層構造

韓国系アメリカ人の民族的移住帰還者は彼らの故国の労働市場において相対的に高い地位を占めているので、韓国系アメリカ人は韓国においてはより満足し、快適であると感じることが多い。これは、大半が低賃金の肉体労働に従事している韓国系中国人やコリョサラムとは非常に異なっている。彼らは社会的な疎外感や被差別感を有してはいない。従って韓国系アメリカ人の民族的移住帰還者は、彼らが「韓国系アメリカ人」であることに自信と肯定的な感情を有する傾向があ

る。いい換えるならば彼らは、「朝鮮民族」でありかつ「アメリカ人」であると感じている――それは健全なディアスポラのアイデンティティであって、自分たちが真に「地球市民」であるという感情を抱かせるものである。これは、日本における日系アメリカ人や中国への中国系アメリカ人の帰還者の場合と類似しており、彼らは「日系アメリカ人」や「中国系アメリカ人」であるということに対して肯定的である。

したがって韓国系アメリカ人の民族的移住帰還者があらゆる「朝鮮民族」の間での民族的な階層構造においてはトップの位置にある。そのような地位のゆえに、韓国社会に対してよりリベラルで寛容な態度を有することになり、またしばしば彼らは韓国社会に進んで寄与しようとする。たとえば、アメリカやその他の西洋諸国に婚姻を通じて移住した韓国女性たちが、KIMWA（Korea International Marriage Woman's Association）と呼ばれる大規模はネットワークを最近組織した。その組織のメンバーは韓国在住のさまざまな文化を有する家族――多くの場合韓国人の夫と外国人の妻で構成される家族――を、外国人妻や多文化的な家族を担当する地方政府のスタッフとともに、彼女たちの多文化的な経験を共有することを通じて援助するボランティアの活動を行なっている。

上で見たように、アメリカやその他の西洋の国ぐにのような豊かで発展した国からやってくる民族的移住帰還者――彼らは民族的な故国においては肯定的な移住経験を有している――にとっては、民族的移住帰還は通常は肯定的なことがらである。このようなことから、彼らがより肯定的で健全な民族的アイデンティティや、さらには世界に対するコスモポリタンな態度をとることに役立っており、それは韓国系中国人やコリョサラムの民族的移住帰還とは完全に対照的である。

Ⅵ．結論――３つのケースの比較と分析

上で見たように民族的もしくはディアスポラの帰還は一般的ではないが、1980年代以後の世界における国際的な移民の重要な一形態をなしている。これは世界の政治と経済における若干の重要な変化によって引き起こされたものである。すなわち、東ヨーロッパとソビエト連邦における社会主義体制の崩壊；ラテンアメリカでの経済不況；東アジア経済の勃興、等々によるものである。民族的移住帰還のなかには政治的な理由によるものもあるが、大半の民族的移住帰還は経済的な理由から行われている。その場合、在外同胞に対する受け入れ国の移民政策が重要な位置を占めていた。リベラルな移民政策を採用する西洋の国のなかには人道主義に依拠して同胞を受け入れる国にもあるが、東アジアの国ぐには経済的な理由から海外から同胞を受け入れている。

民族的移住帰還すなわちディアスポラ集団の「故国帰還」は単純なあるいはスムースなプロセスではない。帰還者は故国において同胞から歓迎されることを期待しているが、民族的移住帰還の実態としてはさまざまなあつれきが存在している。実際にも大半の民族的移住帰還者は彼らの故国において種々の否定的な経験をしている。受け入れ国の支援体制が存在するにもかかわらず帰還者の生活は容易なものではない。とくに、発展の遅れた国からより発展した国に帰還した民族的移住帰還者は多くの困難に遭遇する。大半の場合に彼らは、地元民が敬遠する低賃金の肉体

労働に従事しており、そのことから彼らは経済的に劣位におかれている。また彼らは地元民によって文化的に差別され、社会的にも疎外されている。しばしば地元の同胞や政府は彼らを、豊かで発展した国ぐにからやってくる同胞とは異なった扱いをしている。

故国でそのような否定的な経験をしたことから、特定のエスニックなコミュニティとナショナルなコミュニティの構成員であることの意味を民族的移住帰還者が再考するようになる。皮肉なことに、以上のような経験から、彼らが自らのエスニックなアイデンティティとナショナルなアイデンティティを彼らの故国において再構成するように仕向けることができるのである。このような現象はいくつかの民族的移住帰還の事例において観察されている。すなわち、東ヨーロッパとかつてのソ連からやってきたアウスジードラー；ラテンアメリカの国ぐにからやってきた日系人；中国からやってきた朝鮮族、などである。さらにまた、民族的移住帰還後の否定的な経験は、父祖の故国にける「故国」の観念をも変更することが可能である。上述したように、多くの朝鮮族たる韓国系中国人は韓国への帰還後に「中国人である」という感覚をより強化している。自分たちが「朝鮮民族である」ということは中国での日常生活のなかで常に強化されてきているが、彼らの父祖の土地（韓国）においては彼らが「中国人である」という感覚はより強調されている。このことは、彼らの母国たる中国――とりわけ、中国共産党の相対的に寛容な国籍に関する政策のもとで――が有する肯定的な意味を想起させるのである。エスニックなマイノリティとして、朝鮮族はさまざまな権利、とくに言語と文化に関する権利を享受していた。いずれにしろ中国は巨大で大きな力を有する国であるのに対して、韓国は弱小で停滞的な国である。そのゆえに、彼らのアイデンティティとして「中国」により重きを置くのである。

それに対してソビエトからの朝鮮民族のディアスポラはアイデンティティの変容に関して異なった道を歩んでいる。中国からの同胞とは異なりコリョサラムの民族的移住帰還者は彼らのことばや伝統を喪失してしまっている。そのゆえにコリョサラムの民族的移住帰還者は、中国からの同胞のようには自らを「朝鮮民族である」と強く感じることはない。彼らは朝鮮族よりも劣位の経済的な地位におかれ、また彼らはしばしば仕事場においては朝鮮族の監督下のもとで働いている。このことから彼らは中国からの同胞に対して憤りを感じている。そして彼らは、韓国の国内における異なった「朝鮮民族」コミュニティの存在について学ぶのである。彼らが韓国において自らのアイデンティティが問題になる場合には、彼らは自らがやってきた国、たとえばウズベキスタンを自らのアイデンティティのよりどころとして選ぶことはない。それは、朝鮮族の人びとが「中国」という国から感じるような力強い感覚を与えないからである。したがって彼らの多くは「ロシア人」としてのアイデンティティを有している。彼らの母語はロシア語であり、彼らの「故国」は極東ロシアであった。

韓国系アメリカ人の民族的移住帰還のケースもまた朝鮮族やコリョサラムの民族的移住帰還とは異なっている。リベラルで民主的な社会に居住しているので、韓国系アメリカ人はアメリカにおいていかなる文化的な抑圧をも経験していない。「アメリカ」という国自身がさまざまな肯定的な意味と特質を有しているので、アメリカ在住の朝鮮民族が「朝鮮民族の遺産を引きつぐアメリカ人」であることを大切にし、通常は彼らの朝鮮民族としてのエスニシティを誇りにしている。

彼らが「朝鮮民族である」（あるいは、場合によっては「アジア人であること」）は、彼らの民族的な特徴のゆえに選ぶことのできるものではない。支配的なヨーロッパ人は常に朝鮮民族（そして他のすべての非ヨーロッパ民族）を、彼らが居住している期間にはかかわりなく「外国人」として認識する。いずれにしろ彼らは民族的な故国において優遇され、そして事実彼らは彼らの同胞よりも経済的、社会的に高い地位を占めている。このような積極的な経験から、彼らが「韓国系アメリカ人である」ということに対して積極的な意味を育むことを後押しする。

以上の３つの朝鮮民族のディアスポラの故国への帰還の事例は、ディアスポラの人びとが彼らのアイデンティティと「故国」の観念をどのようにして創造し、再構成し、そして修正するかに関する重要で興味深い事実を提供している。彼らの「故国」の観念は多層的で状況依存的である。朝鮮族とコリョサラムの民族的移住帰還者および、彼らの民族上の故国におけるアイデンティティの変容のいずれもが、韓国におけるエスニックなナショナリズムとナショナルなアイデンティティの現代的観念 ── それは朝鮮民族の「血統」とエスニック / 民族的な同質性に関する根本的な観念に依拠している ── に対して課題を提起している。エスニック / ナショナルなディアスポラの人びとのアイデンティティの流動性と柔軟性に関してさらなる理解を推し進めるということが、民族的移住帰還研究が有する多くの成果のひとつである。このことは、日本と韓国を含む多くの政府が労働力確保のために在外同胞を呼び寄せ、彼らは現存するエスニック / 民族的な彼らの社会の同質性を乱すものではないと確信していた時にはまったく理解していなかったことがらである。そのような民族的移住帰還という現象をさらに研究しなければならないのはまさにそのことの故にである。

［原注］

1）私は数年前にオークランドである中年の中国人の女性にあったが、彼女は自分が中国人と呼ばれていると話した。彼女はウエリントンで生まれ、彼女の曾祖父が1860年代にニュージーランドに移住していた。当然に彼女は中国語をまったく話すことができず、英語が母語である。ある時クロアチア生まれのヘアスタイリスト（約10年前にニュージーランドに移住した）が彼女に、なぜそのように英語が「流暢に」話せるのかと尋ねた。これはつぎの事実を証明している。すなわち、アジア出身の古くからの移民よりも後にニュージーランドに移住してきた場合でも、ヨーロッパ系の移民は ── 古くからの中国系の移民の子孫はニューカマーとみなすのに対して ── 自らを主流社会に属するものとみなしているということである。

2）満州への漢民族と朝鮮民族の移民およびロシア人のシベリアへの移民は、19世紀および20世紀初頭の世界の移民の歴史においては重要な要素をなしている。しかしながらそれらの問題は移民史においては無視されてきている（McKweon 2004）。

3）市場向け野菜栽培業とは大規模な商業的農業形態で、それはソビエト時代にはとくにソビエト朝鮮民族の農業経営であった。ソビエト朝鮮民族はこのビジネスを‘kobongjil’と呼んだ。そして彼らはソ連式の集団農場をモデルとした農業経営集団を形成し、玉ねぎやきゅうり、コメ、スイカなどの市場作物を栽培した。土地の賃料を支払って、それらの作物をモスクワやレニングラード、キエフ、ミンスクなどを含む大都市で販売した。そのような「資本主義的な」農業経営はソビエトの社会主義経済においては必ずしも合法的なものではなかったが、多くのソビエト朝鮮民族はこの仕事に従事し、大きな富を蓄積した。

REFERENCES

Choe, Hyun (2006). “National Identity and Citizenship in the People’s Republic of China and the Republic of Korea.” Journal of Historical Sociology 19/1: 84–118.

Chŏng, Sin-ch’ŏl (2000) Chungguk Chosŏnjok: kŭdŭlŭi miraenŭn ... [Ethnic Koreans in China: their future is…], Seoul: Sin In'gansa.

Clifford, James (1994) “Diasporas.” Cultural Anthropology 9 (3): 302–38.

Fang, Mi Hua (2013). “Chaehan Chosŏnjogŭi Silch’on Chŏllyakpyŏl Kwisok ŭisik kwa chŏngch’sŏng” (Strategy of Practice of belonging and identity for ethnic Koreans in Korea). Sahoewa Yŏksa 98: 227–257.

Fox, Jon. E. (2003). “National Identities on the Move: Transylvanian Hungarian Labor Migrants in Hungary” Journal of Ethnic and Migration Studies 29/3: 449–466.

Gal, Allon, Athena S. Leoussi and Anthony D. Smith eds. (2010). The call of the homeland: diaspora nationalisms, past and present. Leiden; Boston: Brill 2010.

Glick Schiller, N. (1997). The situation of transnational studies’, Identities: GlobalStudies in Culture and Power, 4 (2), 155–166.

Hŏ, Myŏng-chŏl (2001) ‘Chungguk Chosŏnjok chŏngch’esŏng yujie kwanhan sago’ [Reflections on the identity maintenance of Korean Chinese] in Kim and Hŏ (eds.) Chungguk Chosŏnjok Sahoeŭi munhwa usewa palchŏn chŏllyak [Korean Chinese: their cultural power and development strategies], Yanji: Yŏnbyŏn Inmin Chulpansa, pp246–283.

Hobsbawm, E.J. (1997[1990]). Nations and nationalism since 1870. Cambridge: Cambridge University Press.

Hoffman, F. (1986). The Korean minority in China: Education and publishing. Korea Journal, 26 (4), 13–26.

Song, C., Hong, Y., and J. Park (2013). “Korean, Chinese, or What?: Identity Transformations of Korean Chinese Migrant Brides in South Korea”. Asian Ethnicity 14 (1): 29–51. http://dx.doi.org/10.1080/14631369.2012.703074

Jeon, Jaeho (2005). “Changes in the Korean Identity in the Globalization Era.” Korea Focus 13, no. 1: 128–146.

Joppke, Christian (2005). Selecting by Origin: Ethnic Migration in the Liberal State. Cambridge, Mass.: Harvard University Press, 2005.

Kang, Jin Woong (2008). “The Dual National Identity of the Korean Minority in China: The Politics of Nation and Race and the Imagination of Ethnicity.” Studies in Ethnicity and Nationalism 8 (1) (April 1): 101–119. doi:10.1111/j.1754-9469.2008.00005.x.

Kim, Chae-guk ([1996] 1998) Hangugŭn ŏptta [No more South Korea], Mudanjiang: Hŭngryonggang Chosŏn Minjokchulpansa.

Kim, Hyejin (2010). International Ethnic Networks and Intra-Ethnic Conflict: Koreans in China. New

York: Palgrave Macmillan.

Kim, Wangsik (2003). “The Ethnic Identity, Diaspora’s Nationalism of Korean-Americans” Phenomenon and Perception. Pages: 55–75.

Lee, Min-Dong Paul (2005) ‘Contested Narratives: Reclaiming National Identity through historical Reappropriation among Korean Minority in China’ Stanford Journal of East Asian Affairs 5 (1): 100–112. http://www.asia-studies.com/asia/SJEAA/2005v5.1/korea2.pdf

Lemish, Dafna (2000) “The Whore and the Other: Israeli Images of Female Immigrants from the Former USSR” Gender and Society 14/2: 333–349.

Lie, John. (2008). Zainichi (Koreans in Japan): Diasporic nationalism and Postcolonial Identity. Berkeley: University of California Press.

McKweon, A. (2004). Global migration, 1846–1940. Journal of World History, 15 (2), 155–189.

Min, Pyong Gap. 1992. “A Comparison of the Korean Minorities in China and Japan” International Migration Review Vol. 26, No. 1: 4–21.

Münz, R. & Ohliger, R. (Eds.) (2003). Diasporas and ethnic migrants: Germany, Israel, and post-Soviet successor states in comparative perspective. London: Frank Cass.

Park, Jung Sun, and Paul Y.Chang (2005) "Contention in the Construction of a Global Korean Community: the Case of the Overseas Korean Act." Journal of Korean Studies 10, no. 1: 1–27.

Park, Kyeongju and Changzoo Song (2010). “National Identity Reflected in the post-1990s Korean Chinese Literature”. Korea-China Humanities 31 (1): 47–73.

Patterson, Wayne (1976). “Upward Social Mobility of the Koreans in Hawaii” Korean Studies 3: 81–92.

Remnnick, L. I. (1998). “Identity quest among Russian Jews of the 1990s: Before and after emigration”. In Krausz, E. & Tulea, G. (Eds.), Jewish survival: the identity problems at the case the close of the twentieth century. (241–258). New Brunswick, NJ: Transaction Publishers.

Skrentny, John D, Stephanie Chan, Jon Fox, and Denise Kim (2007). “Defining Nations in Asia and Europe: A Comparative Analysis of Ethnic Return Migration Policy” The International Migration Review 41/4: 793–825.

Seol, Dong-Hoon; Skrentny, John D. (2009). “Ethnic return migration and hierarchical nationhood”. Ethnicities 9 (2): 147–174.

Sheffer, Gabriel (2003) “From Diasporas to Migrants, from Migrants to Diasporas.” In Diasporas and Ethnic Migrants: Germany, Israel, and Post-Soviet Successor States in Comparative Perspective, Rainer Műnz and Rainer Ohliger, eds. London: Frank Cass, pp. 21–55.

Shin, Gi-wook (2006) Ethnic Nationalism in Korea, Stanford: Stanford University Press.

Song, C. (2007). ‘Korea and China over Chosŏnjok: De-territorialised nationalism vs. Zhonghua nationalism’, International Review of Korean Studies, 3, (1), p75–102.

Song, Changzoo (2009). “Brothers Only in Name: the Alienation of Korean Chinese Return Migrants in South Korea” in Takeyuki Tsuda (ed.) Diasporic Homecomings: Ethnic Return Migration in

Comparative Perspective. Stanford, CA: Stanford University Press. pp 281–304.

Song, C. (2016). “Kimchi, Seaweed and Seasoned Carrot in the Soviet Culinary Culture: The Spread of Korean Food in the Soviet Union and Korean Diaspora” Journal of Ethnic Foods: pp DOI: 10.1016/j.jef.2016.01.007

Song, C. (2015). Identity Politics and the Meaning of ‘Homeland’ among Korean Chinese Migrants in South Korea. Urban Anthropology and Studies of Cultural System and World Economic Development, 43 (4), 441–479.

Song, C. (2014). Transcultural Business Practices of Korean Diaspora and Identity Politics: Korean Sushi Business and the Emergence of “Asian” Identity”. Studies of Koreans Abroad (在外韓人研究) Vol. 34: 397: 428. In Korean.

Song, C. (2014). Engaging the diaspora in an era of transnationalism. IZA World of Labor. doi: 10.15185/izawol.64 http://wol.iza.org/articles/engaging-the-diaspora-in-an-era-of-transnationalism

Takenaka, Ayumi (2009). “Ethnic Hierarchy and Its Impact on Ethnic Identities: A Comparative Analysis of Peruvian and Brazilian Return Migrants in Japan” in Tsuda ed. Diasporic Homecomings: Ethnic Return Migration in Comparative Perspective. Stanford: Stanford University Press, pp. 260–280.

Tsuda, T. Gaku (2010). “Ethnic Return Migration and the Nation-State: Encouraging the Diaspora to Return ‘Home.’” Nations and Nationalism 16 (4): 616–636.

Tsuda, T. Gaku (2009). Diasporic Homecomings: Ethnic Return Migration in Comparative Perspective. Stanford: Stanford University Press.

Tsuda, T. Gaku (2009). “Why Does the Diaspora Return Home? The Causes of Ethnic Return Migration.” In Diasporic Homecomings: Ethnic Return Migration in Comparative Perspective, Takeyuki Tsuda, ed. Stanford: Stanford University Press, pp. 21–43.

Tsuda, T. Gaku (2003). Strangers in the Ethnic Homeland: Japanese Brazilian Return Migration in Transnational Perspective. New York: Columbia University Press.

Tsuda, T. Gaku (1999a). “Transnational Migration and the Nationalization of Ethnic Identity among Japanese Brazilian Return Migrants.” Ethos: Journal of the Society for Psychological Anthropology 27 (2): 145–179.

Tsuda, T. Gaku (1999b) “Ethnic Preferences: The Positive Minority Status of the Japanese Brazilians and Their Ethnic Encounters with Other Minority Groups in Brazil.” In Encounters: People of Asian Descent in the Americas, Roshni Rustomji-Kerns, ed. Boulder, CO: Rowman and Littlefield, pp. 209–222. (Refereed volume)

Yoon, Injin (2014). “Social Identity and Language Use Patterns of Koreans in the Commonwealth of Independent States” Studies of Koreans Abroad Vol. 33: 63–91.

Yoon, Injin (2003) “Histories of Global Korean Migrations and Identities: A Comparison” Overseas Koreans Journal: 5–64.

Yu, Myung-Ki. (2002). “Dilemma of Joseonjok people: Ethnicity vs. nationality. Korea Focus, 10 (6),

100–115.
Yuh, Jiyeon (2002). Beyond the Shadow of Camp Town: Korean Military Brides in America. New York: New York University Press.

**本稿は、2016年10月19日に法学研究所にて開催された「民族上の故国への帰還にともなう韓国系移民のアイデンティティ」（第130回特別研究会）での、オークランド大学文学部上級講師・チャンズー・ソンによる報告原稿の翻訳である。但し本稿は、当日の報告をもとにソンが従来の研究をもとに新たに書き下ろした原稿を角田が翻訳したものである。

チャンズー・ソンの経歴・業績および別稿の翻訳についてはつぎのふたつを参照。チャンズー・ソン、角田猛之訳「アイデンティティ・ポリティクスと韓国における韓国系中国人移民がいだく『故国』の意味」（関西大学法学論集第66巻１号（2016・5）および同「名目上の兄弟 ── 韓国に帰還した韓国系中国人移民の疎外感とアイデンティティの変容」・「越境主義の時代におけるディアスポラ包摂 ── 韓国のディアスポラの包摂は国の発展を支えることが可能」（同上、第66巻２号（2016・7））

本論文の理解の一助として、同研究会におけるソン報告への金玲（関西大学法学部准教授）のコメント原稿と、フロアーからソン報告に対してなされた市原靖久（関西大学法学部教授）と権南希（関西大学政策創造学部准教授）の質問と、それに対するソンのコメントの概要を以下に掲載する。

(1)　金玲のコメント

ソン先生、興味深くそして分かりやすいご紹介をありがとうございます。私はソン先生と専門が全く違いますので、専門的な観点からのコメントはできません。この点ご了承ください。以下においては、中国出身の朝鮮族という立場からいくつか体験談を交えてお話させていただきたく存じます。

ソン先生のご報告にもありましたように、中国の朝鮮族を世代別に大まかに分類すると、日本植民地時代に韓国から中国に渡った１世、そして1949年以降中華人民共和国が成立した後中国で産まれた２世、1960年代の文化大革命を経ていない70年代、80年代に中国で産まれた３世となります。ちなみに、私は1980年代生まれの３世に該当します。

１世の場合は、韓国で産まれ、10代20代を韓国で過ごしてから中国に渡った人がほとんどですので、韓国を唯一の「母国」と考える傾向にあります。中国で数十年生活したにもかかわらず、１世の中には、特に女性を中心にほとんど中国語が話せない人が多く、コミュニティももっぱら朝鮮族同士で形成され、漢民族と接する機会はほとんどなく、朝鮮時代の言葉、文化を維持できています。１世は80年代末から90年代序盤に韓国への親族訪問が許され、再び韓国の地を踏むこととなります。１世が韓国を訪問する際、韓国在住の兄弟などの親族との再会がメインな目的で、しかも高齢であるため、訪問を機に韓国で出稼ぎする人はほとんどいません。

ソン先生のご紹介にありました、中国朝鮮族のアイデンティティの変容は、主に２世の間で生じていると思います。1940年代に中国政府から土地を分配された朝鮮族は、主に稲作りの農作業に従事していました。しかし、1970年代末の中国改革開放の時期になると、中国国内の経済的基盤が多様化し、貧富の差がみられるようになりますが、朝鮮族は、農業だけでは生計を維持できなくなったため、農業離れとなると同時に、中国東北地区の国有企業などに務めていた人たちもリストラに遭い、大量の労働力が余る事態となります。同時期、韓国経済は高速に発展し、大量の労働力を必要としていました。朝鮮族は中国国内でも、レストランを経営したり、民族食品を販売するなどして、収入を得ようとしましたが、それより、１世とともに韓国を訪問し、そのまま賃金の高い韓国で働くことに魅了を感じるようになりました。90年代のちょうど私が中学生だったころ、一学年に150人くらいの生徒がいましたが、両親とも子供と一緒に暮らす家庭はほとんどいませんでした。以前農業に従事した人、国有企業からリストラされた人、ひいては社会的地位は比較的高いものの、収入の低い教員まで韓国に出稼ぎに行くようになりました。おそらく、中国の政府機関に務める公務員以外のほとんどの朝鮮族は、出稼ぎのために韓国に長期滞在した経験があると思います。

２世は、自分たちの親から聞かされた話などから、韓国へのノスタルジアが生まれ、言葉も文化も通じる韓国での新たな生活に期待を抱くようになります。しかし、ベースの言葉と文化が通じるとはいえ、韓国は数十年の間、欧米の文化等の影響をもうけ、言葉も食文化をはじめとする文化も独自の発展を遂げ、一方、中国の朝鮮族も中国の影響などをうけ、言葉、食文化の面などで変貌を遂げていました。韓国に出稼ぎに行った朝鮮族は、韓国社会の慣行と秩序を尊重しながら共存していく姿勢を欠いていて、また、主にきつい重労働に従事する現実から当初の夢が潰え、誠実に仕事に取り組む姿勢をなくすようになりました。このようなことが原因で、朝鮮族の評判が落ちたり、差別されたりして、朝鮮族のアイデンティティの変容にも影響を与えたのではないかと思います。

そして、韓国社会からの原因を探ってみますと、韓国は、中国のような多民族国家と違って、ずっと単一民族国家として発展してきました。そのため、異質な集団との共存の方法を知らず、社会システムの融通性の面においても弱いのです。韓国が労働力の需要から朝鮮族を受け入れた以上、同じ祖先をもつ朝鮮族との共存の方法を工夫し、多文化社会を形成して、グローバル国家に躍進しなければなりません。たとえば、外国人による不祥事・犯罪が発生した場合は、外国人の集団全体を非難する姿勢もよくありません。

このように２世によって韓国社会に残された印象と偏見は固定化され、韓国社会における朝鮮族のマイナスのイメージはなかなか払拭されない状態にありますが、朝鮮族３世の韓国での暮らしぶりは、彼らの親世代とはまた異なってきます。３世の中では高学歴の人も多く、バイリンガルという言葉の面での優勢と専門的知識を生かして、各界で活躍しています。異文化理解にも優れた３世は、韓国社会の秩序と慣行に配慮しながら、韓国の大学で教鞭をとったり、一流の法律事務所で弁護士をやったり、大企業でバリバリ働いたりしています。３世の活動を通じて、韓国社会における朝鮮族のイメージが少しでも改善できればいいと思い

ます。もちろん、３世の中にも、彼らの親世代のように、工事現場、レストラン、家政婦などとして重労働に従事している人もいます。彼らは、まさに、小さい頃韓国で出稼ぎの親と離ればなれに暮らし、ちゃんとした教育を受けられなかった悪循環の結果かもしれません。ただし、３世の出稼ぎの数は、２世と比べると少ないと言えます。

３世のアイデンティティの話に戻りますが、彼らの中には祖父母の生国である韓国に親近感を持つ人が多いとは思いますが、中国生まれ、中国育ちで、中国の教育と影響を受けてきたために、民族的な朝鮮人である以前に、中国国民であると考える人がほとんどです。たとえば、私の場合、同じ言葉を話す韓国社会もしくは韓国人に親近感が湧きますが、24歳になって初めて韓国を訪れ、いままで韓国には２回しか行っていません。韓国についてほとんど何も知らないと言ってもいいでしょう。

また、２世、３世が就学する際、朝鮮学校に通うのが当たり前で、ごく少数の人が漢民族の学校を選びますが、３世が自分の子供の学校を選択するときは、ほとんどの人が漢民族の学校に決めます。その理由を周りの知人に何度か尋ねたことがありますが、「朝鮮学校に行かせたら中国社会での競争に負けるから」と同じ答えが返ってきます。３世は、自分の子供に関しては、韓国とのつながりより中国とのつながり、つまり中国社会で生きるための技能の育成をより重視していることを意味します。漢民族と結婚して生まれた子供が朝鮮語を話せなくなっているだけでなく、朝鮮族同士の子供も朝鮮の言葉、文化を失いつつあるのが現状です。

以上、門外漢からの経験談をベースにしたコメントとなります。御静聴ありがとうございました。

Ⅱ-1　市原靖久の質問とソンの応答概要

帰還コリアン移民をめぐる問題から離れることになるが、ERMの一般理論に関わる質問、とりわけ、帰還移民の間での階層格差、低階層に置かれた移民に対する差別、排除、周辺化という問題に関わる質問をしたい。

本日の報告では、帰還ユダヤ人移民について、東ヨーロッパ及びソ連からイスラエルに帰還したユダヤ人移民についてふれられていた。これらの移民は「アシュケナージム」と呼ばれる移民であるが、イスラエルに帰還したユダヤ人移民には、これとは別のグループ、すなわち、スペインやポルトガル、トルコ、アラブ諸国などから帰還した「セファルディム」と呼ばれる移民がいる。ユダヤ人の民族国家イスラエルにおいてアシュケナージムとセファルディムの間の階層格差は顕著であるといわれ、前者が政治や経済の分野での主流派であり、後者は差別され、排除され、周辺化されている。

ソン氏が依拠するERM理論の観点からは、セファルディムはどのように位置づけられるのか。彼らのアイデンティティとはどのようなものになるのか。

Ⅱ-2　ソンの応答

セファルディムとアシュケナージムというふたつのユダヤ人の間には文化や慣行において

さまざまな相違が存在する。それらの相違は長年にわたるユダヤ人のさまざまなディアスポラの歴史を反映している。現在のイスラエル国家の初期の頃においては、アシュケナージムが政治的、経済的、文化的に優勢であり、セファルディムとミズラヒのユダヤ集団はアシュケナージムから劣位のものと見られていた。そのような劣位の位置に置かれていたセファルディムとミズラヒのなかには、自分たちの方が「西洋化された」アシュケナージムよりも「正統な」ユダヤ人であると主張する者もいる。またさらにセファルディムは、彼らの誇りとアイデンティティの拠りどころとして、豊かな宗教的、歴史的な伝統に依拠している。たとえば、セファルディムの歴史家は、彼らがより「コスモポリタン」であること、したがって彼らのユダヤ教がより合理的で、普遍的であるということを強調する。さらにまた彼らは、「ヨーロッパスタイル」のアシュケナージムとは異なり、セファルディムの伝統はユダヤ人とアラブ人の原理的な敵対関係を和らげることに役立つことをも強調する。さまざまな集団間の民族をまたぐ婚姻のように、アイデンティティ・ポリティクスはだんだんとソフトになってくるだろう。

Ⅲ-1　権の質問

韓国政府は、近年、在外韓国人に対して積極的なアプローチをしているように思われる。憲法機関である民主平和統一諮問会議の海外諮問委員制度もその一環である。このような韓国政府の積極的な動きの背景にはどのような狙いがあるのか。また、日本においては在日コリアンの世代間の葛藤が問題となっているが、祖国での記憶がある第一・二世代と第三世代以降の世代にはアイデンティティの形成において違いはあるのか。

Ⅲ-2　ソンの応答

近年、少子高齢化による影響による深刻な人口減少、経済発展の低迷を克服という韓国社会が直面している諸問題の解決策として、現在海外で生活基盤を持つ700万人の韓国人にも積極的アプローチを政策的に取るようになった。

朝鮮族の場合、世代間葛藤というよりは、第１世代を含むオールドカマーとニューカマーの間に葛藤が存在するように見受けられる。既に海外の定住経験があるオールドカマーはSNS等の普及により中国との繋がりをより強く持つニューカマーに対して定住への志向を疑問視することもある。